令和５年度　第４回 Faculty Development 開催報告

「教育実践の共有」

1. 日時と場所

令和５年 12 月 21 日（水）17:00-18:30　光が丘大会議室

2. 参加者数　41 名

3. 趣旨

医学部４・5・6 年生に「充実していたと思う BSL 及び授業」をあげてもらい、その中で最も多くあがった地域・家庭医療講座の BSL および神経解剖・発生学講座の授業について聴講し、参加者自身または講座の授業をより充実させる方法を考えること。

4. 講師

①地域・家庭医療講座　　菅家 智史　　先生

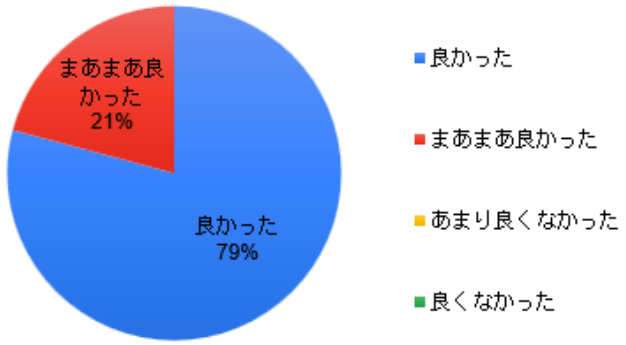
②神経解剖・発生学講座　　八木沼 洋行　先生

5. タイム・テーブル

		時間	講師	内容
2	開会	17:00	大谷晃司	挨拶
3	講演①	17:32	菅家智史	地域・家庭医療講座の BSL について
4	講演②	17:30	八木沼洋行	神経解剖・発生学講座の授業について
5	グループワーク	18:00		講師に問う Best Question を考える
6	回答	18:15		講師より Beat Question に対する回答
7	閉会	18:28	亀岡弥生	まとめ

6.　アンケート結果

Q1. 講習会の評価



Q2. 評価の理由（抜粋）

どのように指導システムを作成しているかとその適応に関して知ることができました
ニーズに応じて工夫を凝らす必要性を強く感じさせられた
学生指導のヒントをたくさん頂けた
学生のモチベーションだけでなく、教育者のモチベーションの維持向上も重要と感じた
有効な教育の実践事例を知ることができたため
基礎、臨床の2つの立場で取り組みを聴くことが出来たため
医学教育の現状がアップデートできました
他の講座での授業で実践してることが聞けたから
各先生の教育に対する想いを聞くことができた
現在の実習のありかたを考え直す機会になったため
学生だけでなく、大学院生の指導をする上でも参考になるところがあった
熱意ある指導を垣間見て、自分もやろうという気になった

Q3. 本日の内容で実際に役立ちそうなことについて（抜粋）

Moodle などの媒体の利用が参考になった
家庭医療学講座での取り組みについて
教員の熱意が今回の講演から伝わってきた。具体的なコツ、方策というよりは、教育に熱意のある教員の講義、実習には自然と魅力が生まれるのであろうと思った
診療への参加型実習と口頭試問的なフィードバック、ビデオ教材
自身の講義分野が「何故」重要かを熟知させる努力が必要だと感じ、その一つの方策として参考になった
学生に些細なことでも責任を持って仕事を任せること。「ロスタイム」を有効活用すること
責任を持たせること、コミュニケーションを促すこと
学生に責任を持たせて、診療に参加させること
学生のモチベーション向上に責任を持たせ、諮問や発表機会を設ける工夫が必要
授業内容の動画は、予習よりも復習後に視聴できるようにした方が望ましいということ
教育に関わるスタッフに、感謝の気持ちを　前面に出すこと
学生に何か一つでもいいので、仕事、課題を与えて、臨床に参加してもらう
正当的周辺参加論
総論として、ちょっとした工夫の積み重ねが重要であるということ

Q4. その他、感想、今後のテーマのご希望など

行政業務と地域の医療の接点等が社会医学として必要になろうと思われました
成績不振の学生へのフォローの仕方などのテクニックなどがあれば知りたいです
実習目標がある一方で大人数の学生に有意義な実習させることが悩みです
態度の評価と指導について。学生だけでなく教員も

★事前アンケート結果

Q1. 本日の受講動機（抜粋）

学生への指導を学ぶため
どんな講義方法が学生にとって良いのかを考えるきっかけになると思ったから
興味あるテーマであった
拝聴する機会のない他の先生方の講義を拝聴できる大変貴重な機会であると考えたため
自然科学講座の所属ですので、この講習会が一番マッチングしていたためです
学生の満足度を上げたいので
BSL 教育を今後どのようにしていけばよいか勉強していきたいため
学生の評価が高い講座の教育に興味があった
基礎上級をはじめ、学生に指導する機会が増えたため
授業の参考になるかと思って
少しでも実習の充実を目指したいので

Q2. 日頃の教育の現場で困っていることとその理由（抜粋）

学生の希望に沿った現場指導	様々な学生にあう教育指導ができればと思うため
レポートや演習の成果を個人にフィードバックしたい	時間が足りないためできていない
学生主体の教育	知っておいて欲しいことが学生の興味と合致しない
BSL で学生の相手が十分に出来ていない	気持ちの余裕がない。時間の余裕がない
病院実習における学生側のニーズが知りたいです	もっと面白い実習にしてあげたいため
同じ講義を受けていても学生間で知識の定着の差が生まれてしまう	1vs 他の「他」の割合が多すぎるため、全体に知識が行き渡る術を考えるのが難しい
困っていることは、学生が予習してこないことです	実験や実習は時間が決まっているので、予習してこないことで、時間が押すからです
双方向の授業	学生があまりに「教えられる」に慣れ過ぎているため
学生による一貫した患者診察	学生の経験にはなるが、患者の承諾や時間的な制約などがあり難しいと感じている
学生数に対して、教員数が少ない	教員数が少ない
日中の学生指導の時間がとりにくい	日常業務のため
学生のモチベーションが低く授業を聞かない	教養科目なので興味が湧きにくいのではないか
アイデアがあっても業務が忙しく関わる時間が取れない	業務が多忙であるため
学生が BSL に何を望んでいるか、十分に把握しきれないこと	3日しか時間がなく、教えることもおおいからか、十分に学生と話す時間がない
BSL の学生の知識レベルのバラつき大きい	同じ題材を与えても、班によって学習状況が大きく異なり、達成度を一定以上に保つのが難しい
BSL の実習内容についてどうすればいいかわからない	学生の望んでいることがわからない
学生のモチベーション喚起	初めから全く話を聞く姿勢がない者が増えた
臨床実習で出た課題をフィードバック出来る機会が欲しいが、得られていない	地理的問題